

# FLAUBERT'S PARROT



フロベールの鸚鵡  
FLAUBERT'S  
PARROT

シュリアン・バーンス 著  
斎藤昌三 訳

コハク

フロベールの鸚鵡

一九八九年九月三〇日第一刷発行  
一九八九年二月五日第二刷発行

訳者

◎ 斎藤 昌三

発行者

高橋 孝

印刷者

杉浦 博

発行所

株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部〇三二九二七八一一

編集部〇三二九二七八一一

振替 東京 九一三三二二八

郵便番号一〇一

訳者略歴

一九四一年生

一九六四年東大仏文科卒

法政大学教授

主要著書

『背後の時間』(筑摩書房)

『フロベールの小説』(大修館書店)

主要訳書

フロベール『書簡集』(共訳・筑摩書房)

モーパッサン『女の一生』(集英社)

トニー・デュヴェール『幻想の風景』(白水社)

図書印刷・加瀬製本

ISBN 4-560-04454-6

Printed in Japan

フロベールの  
鸚鵡

Julian Barnes  
*Flaubert's Parrot*

© Julian Barnes 1984

Japanese translation rights arranged with  
Intercontinental Literary Agency, London  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

パ  
ッ  
ト  
に  
—

1  
フロベールの鸚鵡——9

5  
どんぴしゃり!——93

2  
年譜——28

6  
エンマ・ボヴァリーの目——105

3  
見つけたものは自分のもの——49

7  
海峡横断——117

4  
フロベール動物誌——68

8  
鉄道ファンのためのフロベール案内——159

9 フロベールの幻の作品 — 172

13 純然たる実話 — 243

10 告発に反論 — 189

14 試験問題 — 261

11 ルイーズ・コレの語る話 — 208

15 そして鸚鵡は…… — 274

12 ブレイスウェイトの『紋切型事典』 — 234

訳者あとがき 291



「友人の伝記を書くときは、仇を討つてやるという構えでかからねばならない」

フロベール（エルネスト・フェドーへの手紙、一八七二年）

註記

ジェームス・フエントンならびにサラマNDER・プレス社に対して、本書百七十二頁に『ドイツ鎮魂歌』の一節を引用する許可を与えて下さったことを感謝する。なお、本文中に引用されたフランス文の翻訳は、本書の主人公にして話者たるジェフリー・ブレイスウェイト自身によるものであるが、彼とてフランス・ステイグマラーの見事な翻訳のお手本がなければ途方に暮れていたところであろう。

J・B

# 1 フロベールの鸚鵡

北アフリカから来た男たちが六人、フロベールの銅像の足下で金属の球をころがすゲームに興じている。混雑した通りから渡ってくる車の騒音に掻き消されることもなく、球のぶつかりあう音がはっきりと浮きたって響いてくる。指先で最後に一度からかうように撫でてから、褐色の手が銀色の球を投げた。球は落ちて重たくバウンドし、ゆるやかに舞いあがった砂埃のなかで弧を描く。投げた男は動きを止めて、一瞬、しゃれた恰好の銅像と化するかに見えた。両膝を軽く曲げ、うつとりと恍惚状態にあるかのように右の手を差し伸べている。ウエストをしぼった白いワイシャツ、剣き出しになった前腕、それから、手首の表側についた何かしみのようなものが目にとまった。最初は腕時計かと思ったが、そうではない。入れ墨でもなくて、極彩色の写し絵だった。砂漠の国々で熱烈に信奉されている政治指導者の顔の写し絵だ。

まず銅像の話からはじめよう。銅像、といっても、高く突っ立っている本物の銅像のほうの話である。こちらのほうは、一瞬の間のしゃれた銅像などというものではない。もはや変わることはない姿、なんと

も冴えない恰好に仕立てあげられた銅像は、目から銅の涙を流しているように見える。緩く締めたネクタイ、角の張ったチョッキ、だぶだぶのズボン、もじゃもじゃに伸ばした口髭、用心深く警戒するような様子。遠い面影をおぼろに伝える人物像である。このフロベール像は、銅像を見上げる者を見かえそうとはしない。南の方角、このカルム広場から大聖堂の方向をじっと見すえている。彼が軽蔑していた町、かわりに彼自身も無視されていた町を越え、視線は遙か彼方に向けられている。自衛の構えで昂然と頭をあげているから、作家の禿げた頭の全容を見ることができるのはただ鳩ばかりだろう。

これは銅像のオリジナル版ではない。最初にあったフロベール像は、一九四一年、ドイツ軍によって鉄柵やドア・ノッカーのたぐいと同じ扱いを受けて調達され、持ち去られてしまったのである。たぶん、軍帽の徽章にでも化けたにちがいない。その後、十年ほどの間、台座の上は空っぽになったままだった。それから、ルーアンの市長で大の銅像好きの人物がオリジナルの石膏の型（これはレオポリト・ベルンスタムというロシア人の手になるものだが）を見つけたし、市議会は新しい銅像製作を承認した。ルーアン市が自ら真正銘の銅像、銅九十三パーセントに錫七パーセントの像を買い入れることになったのである。鑄造を請け負ったシャティヨン・スウ・バニューのリュディエ社の言によると、この割合の合金は腐食に絶対強いということである。他の二つの町、トゥルーヴィルとバランタンもこの計画に協賛し、こちらは石の像を買い入れた。石像のほうが耐久性は劣っている。トゥルーヴィルでは、フロベール像の腿の上部を補修しなければならなかったし、口髭の一部が欠け落ち、鉄筋コンクリートの鉄筋のような骨組みの鉄線が露出して上唇からとびだしている。

鑄造した会社の言に偽りはないのかもしれない、この新たな鑄造になる銅像は長持ちするのかもしれない。しかし、僕にはどうも信頼してもいいという確たる根拠が見あたらないように思える。なにしろ、フ

ロベールに関する限り、これまで長く変わらず残ったものがあまりないからである。作家が死んで百年とちよつと経ち、今もなお残っている彼のものといえど書かれたものがあるだけである。書かれたもの、すなわち思念、文、比喩、音の流れに変身すべく念入りに練りあげられた散文が残るばかり。彼自身、こうなることを望み、まさに望んだ通りになったわけだ。ただフロベール愛好家たちだけが思いをこめて、こうした事態を残念がっているにすぎない。クロワッセにある作家の家は、彼の死後ほどなくして壊され、その跡地には疵ものの小麦からアルコールを抽出する工場が建った。彼の姿を模した像もこれと同様、いとも簡単に消えてなくなるかもしれないのである。銅像を新たに建立する銅像好きの市長がいる一方、また別の誰かが（まあ、たぶん、本に書いてあることを鵜呑みにするだけの頭の硬い豪傑がサルトルのフロベール論を生半可に読むかなにかして）銅像叩き壊しの壮挙にでることだつてなきにしもあらずである。

まず最初に僕が銅像の話からはじめたのは、まさにそこからこの本の計画全体が生まれたからである。書かれたものを讀むと、これを書いた作家についてとことん知りたくなるのはなぜなのか？ なぜ、僕は作家をそつとしておけないのか？ どうして、書かれた小説を讀むだけで足りないのか？ フロベールが望んでいたのはまさにそのことであつたにもかかわらずである。書かれた文章の確たる存在とは対照的に、作家がどういう人物であるかなどということは取るに足りないことだと彼ほど信じていた作家はほとんどいない。にもかかわらず、僕らは彼の信条に反することをあくまでつづけているのである。絵や写真、顔、署名。九十三パーセントの銅でできた銅像やナダールの写真。衣服の切れっぱしや髪の毛。遺された形見の何に僕らは夢中になるのだろうか？ 言葉だけでは不足だという考えがあるからだろうか？ 僕らには、ひとつの人生が後に遺したものには何か不足を補う真実がひそんでいるにちがいないという思いこみでもあるのだろうか？ ロバート・ルイス・ステイブンソンが亡くなったとき、スコットランド人

の乳母というのがまた商売つ氣たつぷりで、四十年前に作家の頭から刈り取ったと称する髪の毛を澄まして売り出したことがある。これを信用した人たち、こういうものを探しまわっている人たち、詮索一途の人たちが、ソファアの詰物に使えるほど、しこたま髪の毛を買いこんだものである。

僕は、クロワッセのほうは後まわしにすることに決めた。ルーアンには五日間、滞在するのだが、子供のころからの癖が抜けず、一番いいものは最後にとっておくことに決めたのである。作家たちも、時としてこれと同じような衝動に駆られることがあるのだろうか？ まだまだ、待て、最良のものはあとにまわそうというふうに？ もしそうなら、未完の本というのは、何とまあ、欲求不満を起こさせるしろものだろう。その好例が二つ、すぐに頭に浮かんでくる。その一つが『ブヴァールとペキュシェ』、この本のなかにフロベールは世界全体、人間のあらゆる努力と挫折を封じこめ、これを乗り超えようとした。そして、二つめが『家の馬鹿息子』、この本のなかにサルトルはフロベールの全体を封じこめようとした。作家の代表的存在、ブルジョワの代表的存在であり、畏怖を感じさせる存在であり、敵であり、賢者である人物を、封じこめ、乗り超えようとしたのである。

僕自身、昔、物を書くこうと志したことがある。着想はあり、準備のノートを作りさえした。しかし、僕は医者であり、妻も子供もあった。人が本当にちゃんとやれるのは一つのことだけだ。フロベールはよくそのことを心得ていた。僕がちゃんとやることのできたのは医者という本業のほうだった。妻は……すでに亡い。今では、子供たちもてんでに自立して、後ろめたい気持ちになったときにだけ手紙をよこすくらいだ。無論、彼らには彼らの人生があり、仕方のないことである。「人生！ 人生！ つまりは、勃起すること！」先日、僕はフロベールの嘆きを読んだ。読んでいて、僕は自分自身が腿の上部を補修された石像になりはてたような気がした。

書けずに終わった本？ そんなものを悔いているわけではない。本などというものは、すでにありあまるほどあるではないか。それに、ここで僕は『感情教育』の結末を思い出す。フレデリックと彼の相棒デロリーエが自らの人生を回顧する場面である。彼らが一番最後に良き思い出として語り合うのは、何年も前、まだ中学生だったころ、娼家に足を踏み入れたときのことである。念入りに計画を立て、事に備えて特別に髪にウェーブをかけ、娼婦たちに贈る花を盗みさへする。しかし、いざ娼家に入ると、フレデリックはあわてふためき、二人で走って逃げ出す羽目になる。これが彼らの人生最良の日だったというのである。フロベールの示唆するところは、最も確かな快楽は期待することの快楽だということではなからうか。駆けあがって実行・達成という侘しい屋根裏部屋に無理やり押し入る必要などどこにあるだろう？

一日目、僕はルーアンの町をあちこちぶらついて過ごし、一九四四年当時に来たことのある場所を思い出そうと努めた。無論のこと戦争中に町は広い範囲にわたって爆撃され、砲弾の雨を受けた。四十年たった今なお、大聖堂の修復がつづけられている有様である。モノクロの僕の記憶を新たに彩色できるものもあまり見つからなかった。翌日、僕は西のほう、カーンへ車を走らせ、それから北に向かって海岸地帯をめぐる。風雨で傷んだブリキの道標をつぎつぎにたどっていけばいいようになっていく。土木交通省が設置した標識だ。これをたどっていけば「上陸作戦海岸めぐり」ができるというノルマンディー上陸作戦ビーチの観光ルートである。アロマンシュの東がイギリス軍とカナダ軍の上陸ビーチにあたる、——ゴールド(黄金)・ビーチ、ジュノー(女神ユノー)・ビーチ、ソード(剣)・ビーチ。どうも想像力を刺激される言葉の取り合わせとは言えず、そのためかオマハやユタといったビーチほどには、記念すべきものとして記憶されてはいないようだ。もちろん、名前を記憶にとどめるのはそこで行われた戦闘そのものであって、名前が先行するわけのものではないといってしまうばそれまでだが。

グレー・シユール・メール、クウルスール・シユール・メール、ヴェール・シユール・メール、アネル、アロマンシユといった町々。狭い路地を下っていくと、突然、ロイヤル・エンジニアズ（英国陸軍工兵隊）広場とか、W・チャーチル広場とかに出る。赤錆びた戦車が海辺の小屋を護る恰好に据えてあり、船の煙突のような記念碑には英語とフランス語でこう刻まれている。「一九四四年六月六日、ここに於て、ヨーロッパは勇猛果敢なる連合軍により解放された。」あたりは何ということなく平穏に静まりかえっていて、ただならぬ場所という雰囲気などまるでない。アロマンシユで、僕は一フラン硬貨を二枚、展望鏡に入れて（「超望遠・15・60・長時展望可能」、沖合い遙か、モールス信号のように断続的につづくマルベリ・ハーバー〔上陸作戦時の組  
み立て式急造港〕の曲線を目で追った。トン・ツー・ツー・ツーという調子に、間に穏やかな海面を挟んでコンクリートの潜函がつづいている。これらの四角い塊、戦時の名残の廃物は、今では鵜の棲み処になっていた。

僕は、湾に面したオテル・ド・ラ・マリンヌで昼食をとった。戦友たち——戦争という巡りあわせで思いがけなく友達になった人たち——が戦死した場所のすぐ近くにいたわけだが、それなのに感慨に胸塞がれる思いはしなかった。英国陸軍第二軍、第五十機甲師団。眠っていた記憶が蘇ってはきたが、感動はおぼえなかった。感動の記憶すらかえってこない。昼食のあと、僕は記念博物館に行つて上陸作戦の映画を観、それから、車を十キロ走らせてバイユーに向かい、そこで九世紀も前に行われた今ひとつの海峡横断侵攻の情景描写を丹念に見た。マチルド王妃の綴れ織り刺繍は、各々の場面と場面を横につなぎあわせた映画のようだ。この二つの侵攻のいずれもが僕には同じようによそよそしく感じられた。ひとつは事があまりに古すぎて現実感がないし、もうひとつの事実もあまりに馴れ親しみすぎたために現実感がない。僕は過去というものをどう捉えればいいのか？